

港区立郷土歴史館

歴史館だより

巖谷小波 最後？の手紙

小澤 絵理子
(学芸員)

令和2(2020)年は、港区ゆかりの文学者巖谷小波(1870～1933)の生誕150年にあたります。

小波は明治20(1887)年、友人の紹介で尾崎紅葉が主宰する硯友社に入って小説を投稿し始め、明治24(1891)年『こがね丸』を発表して日本の創作童話の先駆者となり、童話の創作活動及び世界各国の童話の紹介などに尽力しました。明治32年にベルリン大学附属東洋語学校の日本語講師として招かれて渡欧し、帰朝後、国語調査委員などを歴任、大正15(1926)年にはデンマーク童話文学紹介者としての功績によって同国二等勲章を受けました。また、日本各地をまわってお伽話の口演を行うなど、童話の普及活動を精力的に行いました。

昭和8(1933)年6月、小波は、中国地方へ口演旅行に出ましたが、広島県西条町で腸閉塞症で倒れ、甥の日下部旦三が院長を務める広島市の日下部外科病院に入院。手術を行いました。直腸ガン末期の状態であることが判明し、44日間の入院の後、8月8日に帰京しました。

当館所蔵の資料に、この時期の小波の4通の書状と10葉のはがきがあります。前述の旅先入院中から、帰京後にかけて、堀成之(1867～1939)に書き送ったものです。堀成之は号を紫山といい、尾崎紅葉と同居していたこともあり。硯友社の同人たちと親交が深く、漢詩を得意とし、とりわけ狂詩では一目置かれる存在でした。

紫山あて8月1日付書簡には、見舞状に対する礼と、経過は良好で、あと10日ほどで帰京すると報告し、病床で作った漢詩を別紙に添え、紫山に見てほしいと記しています。8月6日付書簡では返信への礼と、さらに漢詩の添削を依頼する内容、退院して帰京し、自宅療養する旨が綴られています。また、自身が腸閉塞を患ったことから、

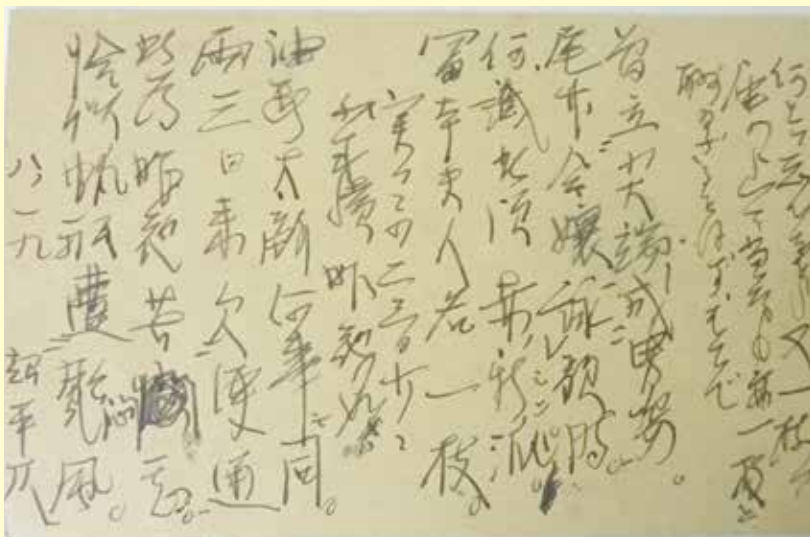
それをもじって「張平索」「超平仄」と署名するユーモアも見せています。

8月12日付の書簡は、紫山が急に発病、高熱を出したことを知り、病状を気遣う内容、小波自身も療養中で訪問できないため書中にて見舞を述べています。なお、堀家(二本榎1-86：現高輪一丁目5番地辺)は、小波宅(高輪南町53：現高輪四丁目1番18号)からは2kmほどの距離でした。

8月9日から19日まで、小波は紫山に宛てて毎日のように葉書を送っています。いずれも短信ですが、若き日々の思い出を記す内容の狂詩を記し、一方で、自身の衰弱の様子も綴っています。8月19日の葉書の末尾では、腸閉塞の症状で苦しい様子を書いています。「(前略)油断大敵何事も同。両三日来欠便通。此為昨夜苦悶甚。恰似帆船遭一颶風。ハ・一九 超平仄」そして、この葉書が紫山あて音信の最後となったと思われます。

翌日、8月20日に小波は日本赤十字病院に再入院し緊急手術を受けますが、すでに手の施しようがなく、28日頃から容態が悪化し、31日の各新聞には危篤が報じられました。昭和8年9月5日午前8時24分小波永眠、63歳でした。

参考文献 巖谷大四「波の覚音」(新潮選書 昭和49年)



堀成之宛小波葉書裏 8月19日(当館蔵)

港区立郷土歴史館

歴史館だより

港区・柔道ゆかりの地めぐり
—戸塚派楊心流—杉本 絵美
(学芸員)

今年^{今年}は56年ぶりに東京でオリンピックが開催される年にあたります。昭和39(1964)年東京オリンピック大会で初めてオリンピック正式種目として実施された柔道は、いまや世界中で行われる国際的スポーツとなりました。柔道の歴史を紐解くと、港区にもその足跡が残されているので、ご紹介します。

柔道は、かつては柔術と呼ばれ、戦闘における組討などが元となった武術でした。江戸時代以降、数多くの流派が現れますが、その流派の一つに楊心(揚心)流(※1)があります。楊心流は、肥前国長崎の三浦楊心を流祖とし、その後、中興の祖と言われる江上司馬之助武経が21歳の時に江戸に上り、江上観柳と名乗り演武場を芝赤羽根心光院(現：港区東麻布1-28)(※2)の近くに開きました。門人は1500人以上いたそうです。江上観柳に学んだ戸塚彦右衛門英澄は、芝西久保八幡山下(現：港区虎ノ門5丁目)に柔術場を開き、門人は900人以上いたと言われ、沼津藩水野家の師範役を務めました。

その子である戸塚彦助英俊も水野家の師範役を務め、将軍家茂に謁見した後、万延元(1860)年に幕府の講武所(※3)の柔術の師範役を命じられました。英俊は柔術場を愛宕山下(現：港区愛宕1丁目)に移し、

門人は1600人を超えたとされます。明治維新後は千葉に移り、千葉県の師範役にもなりました。

柔道といえば、それまでの柔術を「柔道」として広め、「柔道の父」と呼ばれる嘉納治五郎が有名です。嘉納



戸塚英澄墓(延命院)

は江戸時代から続く流派である天神真楊流と起倒流^{てんじんしんようりゅう きとうりゅう}を学び、明治15(1882)年、柔道の教育所である講道館を下谷区北稲荷町永昌寺(現：台東区東上野)に創設し、近代柔道の発展に力を尽くした人物です。その嘉納が、幕末から明治にかけての柔道の発展について回顧する中で、「幕末当時の柔術家で、日本第一強い門下を持っていたのは戸塚彦助であった。」

「天神真楊流の自分の師匠も、起倒流の名家飯久保先生も、戸塚一派とは幕府の講武所においてしばしば戦って苦しめられ、戸塚には強いものがおったということを知っていた」、などと何度も楊心流を取り上げています。また、英俊の子、戸塚英美は明治36年、大日本武徳会(※4)で初めて柔術範士になった二人のうちの一人に選ばれています。これらのことから、楊心流は柔術界におけるトップクラスの流派であったことが伺えます。

なお、港区には楊心流の師範である戸塚彦右衛門英澄(天保8(1837)年没・76歳)の墓が延命院(港区南麻布3丁目)に残されており、その傍らには門人たちの名前が刻まれた石碑が建っています。



戸塚派楊心流ゆかりの地マップ

- ※1 楊心古流または戸塚派楊心流とも呼ばれる。楊心流には2つ流派があり、もう一方の流派は秋山四郎兵衛義昌を流祖とする。
 - ※2 心光院は昭和25年に東麻布1-1の現在地に移転。
 - ※3 幕末の国防体制強化策の一つとして、設置された武道学校。剣術・槍術・柔術・砲術などが行われた。
 - ※4 明治から昭和にかけて、武道の奨励を目的に、武道の演武会の実施や武道に秀でた者の表彰などを行った。昭和21(1946)年に解散。
- 主な参考文献：川内鉄三郎「日本武道流祖伝」日本古武道振興会 1935年
老松信一・植芝吉祥丸「日本武道大系 第6巻 柔術・合気道」1982年
嘉納治五郎「嘉納治五郎 私の生涯と柔道」日本図書センター 1997年

港区立郷土歴史館

歴史館だより

常設展示

「海とひとのダイナミズム 内湾の海洋資源を求めて～貝塚の世界～」より
伊皿子貝塚山根 洋子
(学芸員)

大 正時代から知られる伊皿子貝塚については、昭和53(1978)年から翌年に発掘調査が実施されるまで、カキを主体とする貝層(貝殻が堆積した地層)であることや、縄文時代前期の土器が出土していることなど以外、詳細はわかっていませんでした。

昭和53年当時、伊皿子貝塚の場所(三田四丁目)は日本電信電話公社(現NTT)の用地となっており、同公社の社屋建築工事に伴い発掘調査が行われました。調査の結果、貝層は351㎡の範囲に広がり、その堆積は最も厚いところで1.8mにも達すること、貝層中から出土した土器により、貝殻が堆積した時期は約4000年前の縄文時代後期であることなどが明らかになりました。

貝塚からは、ハイガイやマガキを中心とした大量の貝殻が出土する一方で、土器や石器などの道具類はあまり見つかりませんでした。貝と共に当時の主な食料であった魚や獣などの骨もほとんど出土していません。ただし、クロダイやボラの鱗は数多く確認されており、鱗を取る道具と考えられる貝刃も出土しています。

また、貝層中には焼けた貝や炭化物が堆積している場所が何か所も見つかりました。これは、人びとがごみとして捨てた貝殻の上で火を焚き、貝をゆで

るなどしてむき身にした際の痕跡と考えられています。むき身にした貝は、日持ちを良くするために干し貝にしたのかも知れません。

貝殻以外の食物残滓である魚骨や獣骨、土器や石器などの道具類がとても少ないことが特徴である伊皿子貝塚は、貝層中の焚火の痕跡や、多数の魚の鱗が確認されたことを考え合わせると、居住地にあった日常的なごみ捨て場ではなく、貝むきや魚の鱗取りを行う「海産物の加工処理場」であったと考えられます。

郷土歴史館では、この伊皿子貝塚の長さ15mにも及ぶ貝層断面を展示しており、来館された方に「どうやって持ってきたのですか？」とよく尋ねられます。これは発掘現場で検出された貝層の断面を剥ぎ取ってきたもので、よく見ると6分割されています。接着剤となる薬品を露出した断面に塗布し、布を貼りつけ、接着剤が固まったところで布ごと剥ぎ取りました。

発掘調査の過程で現れた貝層を、剥ぎ取りという方法を用いて保存したことで、遺跡の一部を展示室に持ち込むことができたのです。発掘現場を彷彿とさせる迫力ある貝層断面は、郷土歴史館の見どころの一つとなっています。

展示室の貝層断面をよく観察すると、貝殻ばかりで土器などがほとんどないこと、ハイガイやマガキが集中する層や焼けた貝と炭化物が互層を成している場所があることなど、先に述べた伊皿子貝塚の特徴を見つけることができます。また、貝層断面の前に設置した映像機器では、貝層の高精細な写真を拡大して見ることができるため、より細かな観察が可能です。貝層から読み取れる情報についても解説しますので、貝層断面を見る際の手助けとして、ぜひ活用してみてください。



伊皿子貝塚貝層断面(3階常設展示室)

港区立郷土歴史館

歴史館だより

小学校3年生の「古い道具と昔の暮らし」調べ

田子 文菜
(学芸員)

港 区立郷土歴史館では、さまざまな教育普及事業を行っています。今回は、小学生の見学の受け入れについてご紹介します。

小学校3年生は社会科で、自分たちの暮らしている地域の昔(明治～昭和初め頃)の暮らしや、当時使われていた生活道具について学習する際に、歴史館へ見学に来ます。そのため歴史館では、区内外から寄贈された民俗資料を活用し、小学校での学習内容に応じた、少し昔の暮らしについて学べる見学プログラムを用意しています。

見学では初めに、身近な食に関わる道具、衣・住に関わる道具の説明を行い、その後に資料にさわる体験をします。食に関する道具の説明の導入では、現代よりも米を多く食べていた少し昔の食生活や、電力が家庭に普及する以前の飯炊きについて話していきます。また、炊いた米を保存すること、保温の工夫について、羽釜、飯櫃、飯櫃入れを見せながら紹介します。歴史館が所蔵する資料には、初期の家電もあります。説明では、電気釜や保温ジャーを見せ、現代はスイッチを押すだけで米を炊いて保温できるように、家事の負担が小さくなったことを伝えます。

衣・住に関わる道具の説明では、暮らしの中での

炭の利用について主に話します。電気が普及する以前、炭は家庭内にある身近なものでした。火おこしと十能は、炭に素早く簡単に火をつけ、家の中で安全に持ち運ぶための道具です。火おこしに炭を入れ、下から火を当てると簡単に火が付きます。炭と共に、行火やこたつといった炭を熱源として使う、身体を暖める道具も説明します。

説明の後は、資料にさわる体験です。児童には、体験の前に資料のさわり方について「両手で下から資料を持つ、優しくそっと持ち上げる、あまり高くは持ち上げない、置くときはそっと置く、自分の宝物と同じように扱う」と伝えています。資料を持ち上げた児童たちからは、よく「重い!」という声が上がります。行火や七輪といった火を使う道具は、転倒を防ぐために重く作られています。現代のようにスチーム機能のないアイロンは、熱と自重で皺を伸ばすものでした。少し昔の道具があえて重く作られていることも、児童には驚きのようです。「こんなに道具が重かったら、家事の手伝いはできない」と当時の家事の大変さを考える児童もいます。

資料をさわる体験によって、少し昔の道具が使われていた時代の人々や暮らしに思いを巡らせることで、教科書での知識に実体験の深みが加わると思います。体験で得た発見が、地域を理解し、より身近なものに感じるきっかけにもなるのではないのでしょうか。

少し昔の暮らしのようすと共に児童に伝えている、「自分の宝物と同じように扱う」さわり方は、博物館にある他の資料の扱い方と同じです。学芸員が博物館の資料を取り扱うときも同様のことを心がけています。博物館の資料は文化財であり、港区の宝物でもあります。見学を通じて将来的に、先人たちの暮らしや地域、文化財を大切にする心が育つことを願っています。



見学のようす